

人間関係と接続詞のスタイルシフト —— 大学生・大学院生世代の雑談時の接続詞の使い方 ——

萩原孝恵

要 旨

本稿は、大学生・大学院生世代の雑談時の接続詞の使い方に焦点をあて、人間関係と接続詞のスタイルシフト¹⁾との関係について議論する。調査資料は、宇佐美(2005)「BTSによる多言語話し言葉コーパス：日本語会話1」に収録されている4つの異なる人間関係(初対面・友人・親しい女性同士の友人・親しい男性同士の友人)で使用された接続詞で、2通りの見出し語規定を設定し調査した。その結果、1)標準形を見出し語とした規定では、初対面と友人以上の関係において使用する接続詞数に差が示され、接続詞の種類では友人と親しい友人との間に差が示された。2)異形を別見出しとした規定では、会話相手との関係が近づくとつれ、方言、音脱落短縮、音韻変化+音脱落といったスタイルシフトが起りやすくなることが明らかになった。これは接続詞の位相差と捉えることができ、会話相手との人間関係が接続詞のスタイルシフトを誘因することが示唆された。

【キーワード】 人間関係、接続詞、スタイルシフト、位相差、心的距離

1. はじめに

日本語母語話者(以後「母語話者」)の話しことばにおける接続詞の使い方には、当該会話における話し手と聞き手との人間関係に伴い、語の選択・用法が決定されるという言語使用の実態がある(萩原, 2007a, 2007b)。また、語形のゆれ²⁾の出現という言語現象に着目してみると、そこには会話相手との人間関係が反映している(萩原, 2007a)。すなわち、ある一定以上の人間関係の会話のやりとりの場合に、接続詞のスタイルシフト—基本語³⁾の異形である方言や音声的な語形のゆれ—が観察されるということである。そこで本稿では、この萩原(2007a)の調査結果に基づき、「人間関係と接続詞のスタイルシフト」の相関を調べ、母語話者の接続詞の使い方が、いかに人間関係に影響されているか、その使用実態を明らかにする。

本稿と萩原(2007a)の調査との違いは、見出し語⁴⁾の規定の違いにある。萩原(2007a)の調査では、雑談時に母語話者がどのような接続詞を使って話をしているのか、また人間関係によってどのよ

うに語の使い分けをしているのか、が調査目的であったため、見出し語の規定は、辞書に記載されている単語を基本語―見出し語―とし、その判別の段階で、方言や音声的な語形のゆれは、基本語の異形として整理した。しかし本稿では、萩原(2007b)で基本語に含めた異形を別見出し語として整理し直し、人間関係とスタイルシフトとの関係を検討する。

伊藤(2002)は「見出し語形のゆれに関する問題」(p.61)について、基本語彙の選定を目的とする場合には、語形のゆれを一つにまとめ、単語の使用者の「位相差」を明らかにする目的の場合には、語形のゆれを別見出しとすることが多いと言及している。本稿における調査は、この伊藤の指摘を援用する。そして、母語話者が話しことばの中で使用する接続詞のスタイルシフトの発生条件、語形変化を探る。

次節で先行研究を概観する。3節では、調査資料及び調査目的について提示する。4節では、調査結果を報告する。そして5節では、4節の結果を基に、位相という観点から、人間関係ごとに語形を観察し、スタイルシフトの発生条件と語形変化のルールを検討する。最後に、まとめと今後の課題について述べる。まずは、大学生・大学院生世代の話しことば、いわゆる若者ことばがどう位置付けられ、どのような研究があるのかを概観する。

2. 先行研究

自然発話で観察される接続詞の使用実態について、人間関係という枠組みで分類し、分析している研究は管見の限りない。しかし、周辺的研究、たとえば若者ことばの造語法や若者ことばの特徴等に関する記述は、本調査を分析する上で示唆的であると考えられるため、以下で概観する。

本調査対象とする大学生・大学院生世代の話しことばは、いわゆる若者ことば・若者語⁵⁾、もしくは、キャンパスことば・学生語⁶⁾と称され、1980年代末頃から、そのことばを集めた辞典や語彙集が編纂されてきた(猪野, 1988; 加藤, 1993; 永瀬, 1993; 米川, 1997)。

米川(1996)は、若者語の語形変化を記述し、造語法の分類の一つとして“音の転化”を挙げている。これは既存の語尾を変える形の造語で、たとえば、「うれしい」→「うれびー」、「やっぱり」→「やっぱし」、「ばっちり」→「ばっちし」などである。

方言学の観点から若者ことばを分析している永瀬(2002)の研究も示唆的である。永瀬(2002)は、方言の観点から、若者ことばには「地域方言としての若者ことば」⁷⁾と「社会方言としての若者ことば」⁸⁾の両方の特徴があると述べている。たとえば、前者の例では「うざったい」があり、この「うざったい」は、もともと地域で使われていたもの(東京西部の青梅方言の伝統方言であったもの)が、若者ことばになったもの(東京の中心地の若者たちに使われるようになったもの)で、「東京新方言」(p.219)と呼ばれる「地域方言としての若者ことば」の例だと説明している。一方、後者は、「若者」以外の大人にとっては、耳慣れないことば・汚いことばであったり、それまでには聞いたことのないような言語表現であったり、革新的な表現であったりするため、「多くの大人たちの批判の対象になり、否定さ

れるべき言葉になる」(p.214)と説明している。また、若者ことばの特徴について、「一般的に女性は男性に比べて、言葉使いが丁寧であるということが社会言語学ではいわれている」(p.215)が、「ハラ」、「クウ」、「スゲー」、「デカイ」の4つの語の言語使用調査では、従来「男ことば」といわれてきたものが、10代の高校生の親しい友人に対する言語使用では、男女のことば使いの違いがなくなってきていると指摘している。

以上の研究により、造語法の示唆及び最近の若者ことばの男女差の薄れといった問題について、本稿ではより具体的な記述を試みたい。本稿では、今まで議論されてこなかった若者ことば（本稿では“大学生・大学院生世代”）の接続詞の使い方と、会話の種類（本稿では“雑談”）及び会話相手との関係（本稿では“4種の人間関係”）、との相関関係について分析する。

本稿で展開する議論において“人間関係”を基軸とする理由は、母語話者が位相によって語や表現の選択を行っていることが自明であり、話しことばで使用される接続詞の語の選択においてもそれは例外ではないという根拠による(萩原, 2007b)。それゆえ、いかに会話参加者間の人間関係一話し手と聞き手との心的距離⁹⁾一が影響しているか、そして当該人間関係がいかに“スタイルシフト”という言語現象の誘因になっているか、を検討する。以下、第3節で何を資料とし、どのような調査を行ったのかについて述べる。

3. 調査の概要

本節では、調査の概要として、何を調査資料としたのか、どのような見出し語の判別規定で調査を行ったのかについて述べる。

3.1. 調査資料

調査資料は、宇佐美(2005)「BTS (Basic Transcription System) による多言語話し言葉コーパス：日本語会話1」に収録されている4つの異なる人間関係（初対面同士[11]・友人同士[12]・親しい女性同士の友人[9]・親しい男性同士の友人[10]）の計42の雑談ファイルで、当該4つの異なる人間関係で観察された接続詞を、人間関係ごとにすべて抽出し調査した。前出[]内の数は、調査した会話ファイル数で、以上のファイルにつき、会話の中で使用された接続詞を調査する。しかし、伊藤(2002)が指摘しているように、何を調査したいのかにより見出し語の判別規定が異なってくるため、次項で、どのような判別規定を設定し、何を調査目的としたのかについて述べる。

3.2. 見出し語の判別規定と調査の目的

見出し語の判別規定は、調査の目的によって異なる。本稿では、見出し語の規定を2通り設定することにより、1) 雑談時の接続詞の使用傾向と、2) 人間関係と接続詞の位相差、を調査する。

1) の調査では、方言や音声的な語形のゆれを伴う語一異形一を、辞書に記載されている語一標準形(基本語)一に含め、見出し語と規定する。当該調査により、雑談時に母語話者が接続詞をどのように使っているのか、その使用傾向を知ることができる。2) の調査では、1) で標準形に含めて整

理した異形を、別見出し語と判別し再整理する。当該調査により、雑談の際、会話相手との人間関係によって、母語話者が接続詞の語形を無意識に変えている使用実態を観察することができる。4.1.で1)の調査結果を、4.2.で2)の調査結果をそれぞれ報告する。

4. 調査結果

4.1. 雑談時の接続詞の使用傾向：異形を標準形に含めた調査¹⁰⁾

本調査は、辞書に記載されている単語（基本語）—標準形—を見出し語と規定し、方言や音声的な語形のゆれを伴う語形—異形—については、標準形に含め集計した結果である。本調査により、母語話者の接続詞の使用傾向と、その使用が人間関係と関係があるのか否かを、量的に比較することができる。表1をみてみよう。

表1 人間関係別にみた雑談時の接続詞の使用の比較

人間関係	a. 初対面	b. 友人	c. 親しい女性友人	d. 親しい男性友人
①使用数	698(少)	937	817	841
②種類	20種類(少)	24種類	23種類	23種類
③使用傾向	限られている	分散傾向	分散傾向	分散傾向

表1は、①接続詞の使用数（使用された接続詞の総数）、②接続詞の種類（異なり語数）、③接続詞の使用傾向について、人間関係ごとにその使用実態を比較したものである。この表により①から③の項目を人間関係ごとに比較してみると、①の使用数は、aの初対面の雑談で観察された接続詞の数が最も少なく、698であった。②の接続詞の種類も、aの初対面の雑談で使用された接続詞の種類が他の人間関係に比べ少なく、20種類であった。したがって、初対面同士の雑談では、③の使用傾向という欄に記したように、“限られた接続詞を使用して話している”ことがわかる。すなわち、①の使用数で比較すると、表中のa. 初対面と、b. 友人の間には、接続詞の使用数に差異がある、すなわち境界（太線表示）があることが示唆される。

①の接続詞の使用数に関しては、bの友人同士で使用された数が最も多く937で、続いてdの親しい男性同士の友人が841、cの親しい女性同士の友人が817と続く。親しい男性同士の友人と親しい女性同士の友人の使用数に大きな差はないが、友人同士と親しい女性同士の友人との間には約100の差が示された。そこで、上記の差異を鑑み、②の接続詞の種類と③の使用傾向について再検討する。

②で、使用された接続詞の種類が最も多かったのは、bの友人同士の雑談で24種類であった。次いで、cの親しい女性同士の友人の雑談23種類、dの親しい男性同士の友人が23種類で、同数であった。この結果から、接続詞の種類を、aの初対面同士の場合（20種類）と比べてみると、初対面同士の場合、接続詞の使用語彙は限られており、友人同士・親しい女性同士の友人・親しい男性同士の友人の

場合、バラエティに富んだ接続詞を使用して話していることが示唆される。さらに、接続詞という単語の観点からこの結果を記述すると、心的距離が近い場合（友人同士以上の関係の場合）には接続詞の使用傾向は分散傾向となることも示唆される。そして、この限りでは、人間関係が親しいか、それともただの友人か、という関係性の違いに境界線はないと想定できる。

以上の調査結果から、ほぼ同じような分散傾向が示された接続詞の種類について、友人同士と親しい女性同士の友人及び親しい男性同士の友人間に本当に使用差はないのか、当該人間関係ごとに収録されている個々の会話を再調査し、使用されていた接続詞を度数分布表（表2）に起こし再検討してみよう。

表2 度数分布表

種類	初対面	友人	親女友人	親男友人
0～3	0	0	0	0
3～5	1	0	0	0
6～7	5	2	0	0
8～9	3	1	0	2
10～11	1	4	4	2
12～13	0	3	2	4
14～15	1	2	1	1
16～17	0	0	2	1
18以上	0	0	0	0

この度数分布表は、左の縦列に使用された接続詞の種類を3種類未満、3～5種類、6～7種類…、という階級で設定した場合に、どのような分布がみられるかを表したものである。接続詞の種類とデータの個数は、人間関係（初対面/友人/親しい女性同士の友人/親しい男性同士の友人）ごとに表示している。

しかし、この表2の度数分布表では、使用された接続詞の種類にどのような差異があるのかが不明確であるため、その差異を明示するために、折れ線グラフ（図1）で比較検討したものが、下記図1である。

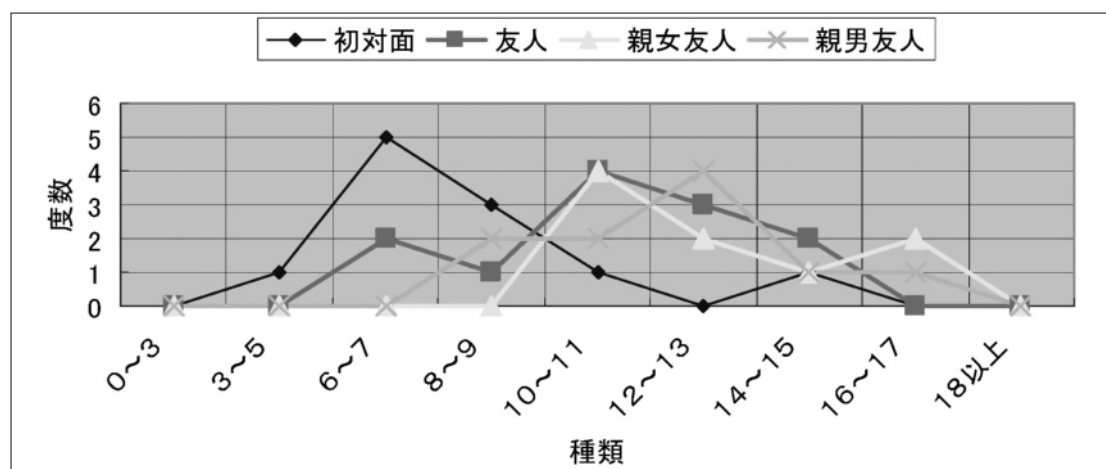


図1 人間関係と接続詞の種類

図1中、一◆一は、初対面同士の雑談で使用された接続詞の種類、一■一は、友人同士の雑談で使用された接続詞の種類、一▲一は、親しい女性同士の友人で使用された接続詞の種類、一×一は、親しい男性同士の友人で使用された接続詞の種類を表している。このグラフで着目したい点は、表1で、接続詞の種類に数値的差異がみられなかった友人同士(24種類)と、親しい女性同士の友人(23種類)及び親しい男性同士の友人(23種類)との境界に、本当に接続詞の使用上の差異はないのか、という点である。会話相手との人間関係の違いは、特に形容のない友人同士という関係と、“親しい”という形容の付いた友人同士という関係性の違いであり、話し手にとって、友人と親しい友人という人間関係—心的距離—の違いは、言語現象と何らかの関係をもって観察されるのか否か、という点が調査のポイントである。

図1を検討してみよう。まず、友人同士(一■一)の推移をみてみると、最も高い山は10~11種類にあり、次に高い山が12~13種類にある。次に、親しい女性同士の友人(一▲一)の推移をみてみると、友人同士(一■一)の場合と同じく最も高い山は10~11種類にあり、次に高い山は12~13種類・16~17種類にある。しかし、親しい女性同士の友人(一▲一)の場合と友人同士(一■一)の場合をさらに比較してみると、親しい女性同士の友人(一▲一)の場合には、10~11種類よりも左側はゼロで崖になっており、どちらかというとな全体的に右寄りの形成をなしている点で、左寄り(8~9種類・6~7種類)に山を形成している友人同士の場合とは異なる山を成している。最後に、親しい男性同士の友人(一×一)の推移をみてみると、最も高い山は12~13種類のところであり、8~9種類・10~11種類にも山が形成されている。一方、14~15種類・16~17種類(右寄り)にも山があり、友人同士(一■一)の推移と比較すると、親しい男性同士の友人(一×一)の場合は、親しい女性同士の友人(一▲一)の場合同様に、右寄りの推移が示されていることがわかる。このことから、表1の種類の値では差異の判断がつかなかった友人同士と親しい同性同士の友人の会話は、個々の会話の検証により、“人間関係が近いほど、接続詞はバラエティに富んだ使用になる”、すなわち“より多くの種類の接続詞を使って話をしている”、ことが示された。

以上、本調査結果をまとめると、実際の会話では、初対面同士の場合、母語話者はあまり接続詞を使わずに会話を展開させ、かつ会話で使用される接続詞の種類も限られたものであることが明らかとなり、さらに、量的な側面で接続詞の使い方を比較すると、初対面同士と友人同士以上の関係の間には、使い方に境界があることが示唆された。また、使用されていた接続詞の種類に類似した使用傾向を示していた友人同士と親しい女性同士の友人及び親しい男性同士の友人の雑談であったが、実際には、その使用分布は異なっている、すなわち、人間関係が近くなるほど、よりバラエティに富んだ接続詞を使って話をしていることが明らかになった。次に、単語の使用者の「位相差」を明らかにするために行った調査結果の報告をする。

4.2. 人間関係と接続詞の位相差：異形を別見出し語とした調査

本調査結果は、辞書に記載されている語を標準形と規定し整理するのではなく、方言や音声的な語形のゆれを伴う語—異形—についても別見出しとして整理した結果である。ここでは、a. 初対面同

士、b. 友人同士、c. 親しい女性同士の友人、d. 親しい男性同士の友人、の順にどのような接続詞の異形が観察されたかを提示する。

まず、「それで」の異形である「で（－）」、「では」のさらなる異形である「じゃ（あ）」について、本調査でどのように扱ったかを説明する。これは、3.2. で述べた通り、本稿では辞書に記載されている単語（基本語）－標準形－を見出し語と規定し整理集計したため、「で」、「じゃ（あ）」のように辞書にある語（『広辞苑〈第5版〉』に掲載されている語）については、本議論から除外した。理由は、表3～表6に示されているように、いずれの人間関係においても、雑談時に使用される高頻度語の接続詞として高い使用率を示しているため、元々は「それで」の異形であった「で」、「それでは」の異形であった「じゃ（あ）」、が話しことばの中でよく使われるうちに、当該語形自体が一般化して普及したと判断できるからである。

表3 初対面同士の雑談の接続詞使用率順位表

順位	使用順位	使用率	累積使用率	見出し語	度数	累積度数
1	1	36.10%	36.10%	でも	252	252
2	2	22.78%	58.88%	で（－）	159	411
3	3	14.04%	72.92%	だから	98	509
4	4	12.89%	85.82%	じゃ（あ）	90	599

表4 友人同士の雑談の接続詞使用率順位表

順位	使用順位	使用率	累積使用率	見出し語	度数	累積度数
1	1	32.23%	32.23%	でも	302	302
2	2	22.95%	55.18%	で（－）	215	517
3	3	15.69%	70.86%	だから	147	664
4	4	6.30%	77.16%	だって	59	723
5	5	5.12%	82.28%	じゃ（あ）	48	771

表5 親しい女性同士の友人の雑談の接続詞使用率順位表

順位	使用順位	使用率	累積使用率	見出し語	度数	累積度数
1	1	30.35%	30.35%	でも	248	248
2	2	24.60%	54.96%	で（－）	201	449
3	3	13.10%	68.05%	だから	107	556
4	4	7.96%	76.01%	だって	65	621
5	5	5.26%	81.27%	しかも	43	664
6	6	5.14%	86.41%	じゃ（あ）	42	706

表6 親しい男性同士の友人の雑談の接続詞使用率順位表

順位	使用順位	使用率	累積使用率	見出し語	度数	累積度数
1	1	33.61%	33.57%	でも	283	283
2	2	16.03%	49.60%	で（－）	135	418
3	3	15.56%	65.16%	だから	131	549
4	4	9.86%	75.02%	だって	83	632
5	5	8.91%	83.93%	じゃ（あ）	75	707

以上の表3～表6の結果から、「で」「じゃ(あ)」については、雑談の際に使用される接続詞の標準語と判別し、語形としては異形であっても、人間関係の異なる会話相手によって特徴的に生じるスタイルシフトとはいえないため、本調査の分析から外した。次の4.2.1. で、初対面同士の雑談で使用された異形について考察してみよう。

4.2.1. 初対面同士の雑談

初対面同士の雑談で使用された接続詞は全部で698であったが、当該人間関係において、特徴的な接続詞の異形—音声的な変化・語形の変化—は、(1)のA4で発話された「んで」だけであった。例文は、すべて宇佐美(2005)の雑談コーパスからの抽出である。

(1) 「んで」が使用された会話

A1: 1年、学部、入って、で、3年の夏から1年韓国にいたんでー。

B1: あー、そうなんですかー。

それは、大学へ行ってらし…。

A2: =はい。

B2: すばらしい<2人笑い>。

A3: いやー、交換、この、交換留学で、

B3: えー。

A4: 行って、んでちょうど1年行って、帰ってきたんでー。

B4: あー。

A5: うーん。

B5: あー、なるほど。

いやでも、実際行ってらっしゃったら、うん、ねえあの、ここで学ぶ以外のこともくす
ごく {<>,,

A6: <んー> {>}。

この会話参加者はいずれも大学院生でそれぞれの専攻学部は異なっている。会話の始まりはAの自己紹介から始まっており、Aの年齢は24才だと話している。「んで」の使用は、Aが学部3年生の時に1年間韓国に交換留学していたことを初対面の会話相手Bに伝える際にA4の発話で観察された。一方、BはAの一通りの自己紹介が終わった後に、自己紹介として自身について話し始め、大学卒業後5年間働き、この4月に大学院に入学したことを話していることから、Bの方が年上であることがわかるのだが、会話中で使用されている文体に着目してみると、使用されている文体(点線表示部分)は、Aが「です・ます体」で話しているのに対し、BはAよりも丁寧度の高い形式で話していることが特徴的で、大学内では単なる年齢だけでは発話に使用される文体は決定されないことが示されている。

次に、友人同士の雑談について検討してみよう。

4.2.2. 友人同士の雑談

友人同士の雑談は12会話で、そのうち7つの会話で異形が観察された。観察された異形は、音脱落の言語現象が最も多く、「そしたら」の使用が8例あった。それ以外は、(1)のような語頭に「ん」が付く「んじゃ」形、下記(2)に示した「そうすと」、さらに話し手の地域方言と予測される(3)のような「だけん」の使用が、それぞれ1例ずつであった。「けど」の使用も4例観察されたが、これは同一の話し手からすべて観察されたもの(「だけん」の使用者と同一人)であることから、当該人物の個人的な使用語彙の範疇にあるものと判断できる。

(2) 「そうすと」が使用された会話

【AとBは学園祭で出すワッフルのお皿を洗う方法を相談している】

A1：<でそこ> {>} につけ込みをするじゃない。

で次に、えっと水の入ったお湯バケツ、あ水バケツで、入れるじゃん。

B1：うん。

A2：で最後に、お湯に通すっていうの <やるから> {<},,

B2：<あー> {>}、だったらけっこういけるかも <しれない> {<}。

A3：<そうすと> {>} なんか、2、3回洗って、そしたらお湯借りに行くとか,,

B3：うん。

A4：いうだけで…。

お湯はそこで沸かしてるから、<水さえ何とかなれば> {<}。

B4：<そうだね> {>}、それだったら何とかなるかもしれない。

(2)は、女性同士の会話で観察された「そうすと」の例で、これは「そうすると」が短縮した異形である。この語形は、親しい男性同士の友人の会話でも1例観察され、永瀬(2002)の調査結果にもあったように、接続詞の異形に性差が伴わないことを示している。

(3) 「だけん」が使用された会話

【「よっちゃん」という駄菓子のイカの話をしている】

A1：『よっちゃん』タイバージョンぐらいの。

B1：そうそう、全部タイ語で。

A2：へー。

B2：それ持ってきとってー。

で、この前すごい辛かったよね。

だけん、“今日の辛い？”“って聞いたら、“うん大丈夫大丈夫”とか言って、“甘いよ”と

か言って。

で「人名1姓」さん食べたら、“あつ”とか言って〈笑い〉。

A 3 : 〈笑い〉。

B 3 : ###とか言って〈笑い〉。

A 4 : てか、もう、ちょっとしたカップルやよね 〈笑いながら〉。

(3) は、「だけん」というおそらく話し手Bの地域方言であろう単語が観察された例である。このような話し手の地域方言が接続詞に観察された例は、友人同士の会話の中では当該会話のみであった。では、なぜこの会話で接続詞に方言が使用されたのであろうか。その発生原因を探ってみよう。

(4) B 1 : 〈韓国語は…〉 {<} 〈笑いながら〉。

A 1 : 〈韓国語〉 {>} は、ハングゴやろ 〈笑いながら〉。

B 2 : そうそう、ハングゴ後。

A 2 : へー。

会いたかったなー。

明日で最後なんや。

B 3 : そうそうそう。

(3) の会話と (4) の会話は同じ会話の断片で、(4) の会話は (3) の会話以前の断片である。文末表現に着目してもらいたい。まず、(4) A 1 の「～やろ」(波線部太字)、A 2 の「なー」、 「～なんや」(波線部太字) という表現から、話し手Aは、西日本方面の出身であることが想定される。また、(3) B 2 の「だけん」の発話から、Bも西日本方面の出身であることが想定される。つまり、この会話参加者は、友人同士という人間関係に加え、A・Bともに西日本方面の出身者という背景が一致しているため、語形のゆれに加え、地域方言への転換現象—スタイルシフト—が起こったものと考えられる。このことは、永瀬 (2002) の、地方から都会に出てきた大学生の言語生活の複雑な状況に関する以下の記述によっても裏付けられる。

地方から都会に出てきた大学生の場合を考えると、大学では、他の地方出身の友達と話をし、教師とも話をし、休みに故郷に帰れば、旧友と話をし。このような場面では異なった文体の日本語を使っているだろう。(永瀬, 2002: 214)

永瀬の記述を援用すると、「だけん」の出現は極めて自然な言語現象として捉えることができる。すなわち、地方出身者の話し手が、会話相手の使う文体やことばに自然にかつ無意識に誘引され、地元へ帰郷した際に地元の友達や家族と話す時に使用する文体やことばに自動的にシフトしてしまう現象と

同様の現象が起こっていると説明できる。そして、当該理由により接続詞のスタイルシフト(「だけん」の出現)が生じたものと判断できる。つまり、母語話者の場合、話し手が聞き手との関係性や場面、聞き手の有している言語的な背景に合わせて文体を変えて話すといった運用力を身に付けていることを、この例は示している。このような言語行動の現れは、“わきまへのスーパー・システム”(井出, 2006)の具現化とも捉えることができる。井出(2006)は、日本語では、「話し手が聞き手、場面やその他さまざまな要素を瞬間的に読みとり、その瞬間に一番ふさわしい表現をその場に組み合わせて使っている」(p.108)、「敬語を使ったり使わなかったり、また呼称、人称詞などいろいろな言語形式や表現の使い分けによってその場に居合わせる人々の位置を指標するということが日本の言語使用の中で求められている」(pp.114-115)と述べているが、この“わきまへのスーパー・システム”は敬語表現に限られたことではなく、話しことばの接続詞の語の選択・用法の選別においても作用していることを、ここで指摘しておく。¹¹⁾

以上、友人同士の会話では、初対面同士にはみられなかった地域方言という異形や、標準形の短縮といった語形のゆれが観察された。接続詞の地域方言の出現は、人間関係のみでなく、聞き手が有す出身地の方言が共有できると話し手が感じる場合にも、会話のやりとりの中で自動的に地域方言に転化されることが示唆された。

次に、親しい女性同士の友人の雑談・親しい男性同士の雑談に関する調査結果を報告し、併せて当該調査結果が示す特徴を分析する。

4.2.3. 親しい女性同士の友人の雑談

親しい女性同士の友人の雑談では、9会話中7会話で異形が観察された。観察された異形は、音脱落・音韻変化の2種類で、標準形に対し9つの異形が出現し、合計57の異形が観察された(次頁表7)。最も多く異形が使用されていたのは#1の会話で15例、次いで#7の会話で11例、#2の会話で8例であった。しかし、表7の集計結果が示しているように、最も多く異形が観察された#1の一方で、異形が全く観察されなかった会話(#6・#8)もあったことから、単に親しい関係であることイコール異形の使用に繋がる、といった短絡的な運用上のルールが母語話者にあるのではない、ことは明らかである。つまり、一般的に、言語使用における表現・語の選択、使用語彙・理解語彙に個人差があるように、異形の使用に関しても、癖のように多用する個人もいれば、全く使わない個人もいるということが改めて示された結果といえる。しかし、全く異形が観察されなかった#6、#8の会話についてさらに言語的特徴を観察してみると、会話参加者の人間関係という枠組み以外に、会話参加者の一方、もしくは両方が地方出身者でない(両者とも東京方言に近いことばを使っている)、あるいは、大学所在地の近県出身者である、といったその他の言語的背景が影響している可能性がありそうであるが、本論ではこれ以上の議論はしない。

表7 親しい女性同士の雑談で観察された異形

ID#	だか	そしたら	したら	んでー	そんで	けど	そいで	そえば	そで	9種類
1	5	2			3	1	2	1	1	15
2	7	1								8
3			2	1						3
4	2	2		3						7
5	1	6	1							8
6										0
7	2	3	4	1		1				11
8										0
9	2		2			1				5
計	19 (33%)	14 (25%)	9 (16%)	5 (9%)	3 (5%)	3 (5%)	2 (4%)	1 (2%)	1 (2%)	57 (100%)

*表7は、「で」「じゃ（あ）」を除いた集計結果である。「で」「じゃ（あ）」を含めた集計結果は付録資料として①に掲載した。

再び表7に戻り、親しい女性同士の友人の雑談で、どのような異形が使用されたかを具体的にみてみたい。まず使用傾向から検討する。最も多く観察された形は、「だから」の「ら」が欠落した（5）のような「だか」という接続詞の語形で、これは異形全体の19%を占めていた。

（5）「だか」の会話例

A1：だ、チャットって、ほ、おしゃべりじゃん,,

B1：うん。

A2：もともと。

B2：うん。

だか、おれもよく分かんなくってさ、とりあえず何か書いたけどさ、あの一、何にも返ってこないし、みたいな。

しかし、（5）のような「だか」の使用は、必ずしもすべての「だから」が「だか」に転化して使用されているわけではなく、この二つの形式が会話中に混在するケースも少なくなかった。次に、「だから」と「だか」の両方が観察される会話の断片をみてみよう。

（6）「だから」と「だか」が両方使用されている会話例

A1：〈ピッチャーの、〉 { } 後ろに、〈2人いたの〉 { }。

- B 1 : <セカンドベース> {>} にいるんだ。
 A 2 : そうそうそう。
 B 2 : はいはいはい=。
 A 3 : = 2人いて,,
 B 3 : 2人?。
 A 4 : だから、ピッチャーの後ろに、ショートともう一人、こう、<2人いたのよ> {<}。
 B 4 : <あーあーあー> {>}、はいはいはい。
 だか、もう、ベースに一人ずつとー,,
 A 5 : <そう> {<}。
 B 5 : <ショー> {>} トがいたってことか。
 A 6 : そう。<で、2人> {<}。
 B 6 : <あれ [↑]、ちょ> {>}、あ、そういうことか。
 A 7 : ショートと <こっち側に> {<},,
 B 7 : <セカンドいたんだ> {>}。
 A 8 : 2人いてー。
 B 8 : あーあー。え、そうだったんだ。
 A 9 : だか、もともとはピッチャーの後ろにいたから (うん)、近い、から。
 B 9 : ショートなの。
 A 10 : そう。

この(6)の例では、話し手AはA4でA1の自身の発話をより具体的に説明するために「だから」を用いている。一方、話し手Bは、A4の説明を聞き、B4で「あーあーあー、はいはいはい」と、理解できたという反応を示した上で、「だか」で自分なりの理解・解釈を述べている。このやりとりで注目すべき点は、当該話題については一旦終結するかに思われた(A6の発言までの)会話のやりとりが、続くB6の「あれ↑」により、AがBの理解が不十分であることに気付かされ、再びAがBに説明を行っていく段階で、「だから」ではなく「だか」が使用された点である。なぜA4では「だから」が使用され、A9では「だか」が使用されたのであろうか。理由として、1)話し手の理由説明に対する心的態度を強く表出する「だから」のくり返し(すなわち、「だから」を用いて強く主張したい場合には、「ら」を強く言ったり、伸ばしたりする)を避ける目的、2)「ら」を落として単語を用いることによって「だから」の自己主張性を緩和する目的、の二つが挙げられる。

また、A9の「だか」の発話においては、形式的特徴も見逃すことはできない。それは、当該発話「だか」で始まり「から」で終わっている、という点である。これを形式的に分析すると、「だから」が、前文代理の「だ」と接続助詞の「から」に、発話の中で分離した現象と説明することができる。しかし、本論では、この「だから」の分離現象については、紙面の関係上これ以上議論しない。

当該人間関係で、「だか」の次に使用頻度の高かった異形は「したら」で、友人同士で最も多く使用が観察された「そしたら」をさらに短くした形で観察された。また、友人同士で比較的多かった「けど」についても、3例観察された。

次に、親しい男性同士の友人の雑談について、当該調査結果と照らし合わせながら比較検討してみよう。

4.2.4. 親しい男性同士の友人の雑談

親しい男性同士の雑談では10会話中9会話で異形が観察され、観察された異形は、方言、音脱落・音韻変化の3種類の現象であった。異形の種類は15種類で、計53例観察された(表8)。10の会話の中で最も多く異形が観察されたのが#7の会話で18例、次いで#4の会話で9例、#3の会話で7例と続く。一方、異形が全く使用されなかった会話(#6の会話)もあった。

表8 親しい男性同士の友人の雑談

ID#	だか	そいで	んでー	そんで	そで	ほんで	たら	そんとき	そんじゃ	そうすと	やけどー	そしたら	そうえば	そいじゃ	だもんで	15種類
1	1		1			1	1									4
2	4															4
3	2			1	1			1	1	1						7
4	5	2		1							1					9
5	2		1													3
6																0
7	11	4										1	1	1		18
8	1			1												2
9			2												1	3
10	2		1													3
計	28 (53%)	6 (11%)	5 (9%)	3 (6%)	1 (2%)	1 (2%)	1 (2%)	1 (2%)	1 (2%)	1 (2%)	1 (2%)	1 (2%)	1 (2%)	1 (2%)	1 (2%)	53 (100%)

*表8は、「で」「じゃ(あ)」を除いた集計結果である。「で」「じゃ(あ)」を含めた集計結果は付録資料として②に掲載した。

表8の調査結果は、表7の親しい女性同士の友人の雑談に比べ、異形の種類が多いことが特徴的である。使用数自体は親しい女性同士の友人の方が4例多いが、使用された異形の種類については親しい男性同士の友人の方が6種類多い。最も高い頻度で現れた異形は、親しい女性同士の友人の場合と同じ「だか」で、全体の使用率の約半分(53%)を占めていた。また、「だから」の会話的語形と考えられる(7)のような「だもんで」の使用も観察された。

(7) 「だもんで」が使用された会話例

A 1 : うん、あとフットライトがね、2 個んなっちゃったんだよね、〈確か〉 {<}。

B 1 : 〈あー〉 {>}。[残念がる口調]

A 2 : 3 つだった、3 つか 4 つ申請してた 〈けど〉 {<}。

B 2 : 〈あん〉 {>} だけ気合の入ってた (うーん) 「人名 3」には悪いがって 〈軽く笑いながら〉。

A 3 : そう。だもんで、どうしようかなーと思って。

/少し間/うまいなー。[バックで流れている曲について]

B 3 : 〈軽く笑う〉。

(7) の、話し手 A が発話した「だもんで」は、田中 (1999 : 230) の「現代の接続表現の用法」という一覧表によれば、「だから」の意味を表す異形でよりうちとけた会話的表現と説明することができる。田中は、日本語の接続表現は「うちとけた会話で使うものから、固い文語的な文章に使うものまで、文体上の段階差をもって発達している」(p.230)と述べ、接続の言い方が、前後の文体とマッチしていないと、何となく落ちつかないと言及している。この田中の指摘を本調査結果で観察される接続詞の標準形から異形への語の選択に関する説明に援用すると、接続詞の適確な使い方は、文体上の段階差のみで語の選択が判断されるものではなく、会話相手との人間関係 (心的距離) の段階差も反映されるという点を指摘することができる。また、「ほんで」、「やけどー」といった接続詞の方言が観察された会話では、前出 (3) と同様に、親しい友人という人間関係に加え、会話者 A・B ともに西日本方面の出身者という背景が一致している点が発生条件として挙げられる。そしてこの言語的背景の一致が、地域方言への転換現象—スタイルシフト—の誘因であると説明できる。

以上、接続詞の異形を別見出しと規定し集計した結果、母語話者の話しことばの接続詞の運用では、人間関係が近づくにつれ標準形の語形を変えた異形の出現率が高まるという現象が明らかになった。すなわち、人間関係が近づくほど接続詞のスタイルシフトが拡張していくという結果が示された。そして特にどのような語形が生じたかといった点に着目して検討してみると、そこには、人間関係という心的距離に比例して、“音脱落が進む”、“音韻変化が進む”といった言語現象 (スタイルシフト) が生じていることが示された。

次項で、さまざまな異形が観察された親しい女性同士の友人・親しい男性同士の友人の接続詞の語形のゆれに関し、基本語と異形を分類することで、実際にどのようなスタイルシフトが生じているのかを検討してみよう。

4.3. 接続詞のスタイルシフト

親しい女性同士の友人の雑談と親しい男性同士の友人の雑談では、それぞれ 57 例、53 例という接続詞の異形が観察された (表 7 及び表 8 参照)。これらの異形について、標準形を基本語とし、同語と判断されるものを の中に分類し検討してみよう (次頁図 2)。

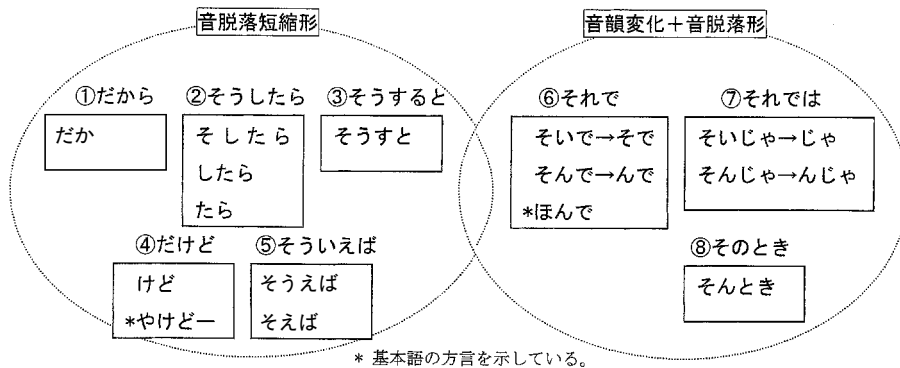


図2 接続詞の基本語と異形の形式の一般化

標準形とそこから派生した異形を図2のように整理すると、実は、接続詞のスタイルシフト（異形の形式）は、二つに大別することができるのがわかる。一つの語形式は、接続詞の標準形—基本語—の一部の音が脱落し、語そのものが短くなった語形（たとえば、「だから」→「だか」や「そうすると」→「そうすと」など）、もう一つは、基本語の一部が音韻変化を起こし、かつ音脱落を起こした語形（たとえば、「それで」→「そいで」→「そで」や「それで」→「そんで」→「んで」など）である。

上野・定延・佐藤・野田 [編] (2005) によれば、「若者ことば・キャンパスことばには、大きく分けて、①集団語的側面、②新語・流行語的側面、③言語变化的側面がある」(p.25) と記している。また、「一般に、よく使われることばは形が変わりやすい」(p.22) と指摘し、「けいさつ」→「さつ」のように、「ジャーゴンの形成パターンとして短縮がある」(p.22) と述べている。多門・半沢 (2006) は、話しことばの例として、「んだ(のだ)」、「ちゃった(てしまった)」といった文末表現の縮約形や、「すっごく」、「やっぱ」といった「日常生活の中で使うくだけた語や音便形の語」(p.160) を挙げ、話しことばの特徴を説明しているが、図2の結果は、ジャーゴンの形成パターンである短縮もみられ、かつ音便形の「ん」への転化も起こっていることが示されている。

実際に観察された接続詞の語形変化のパターンは二つに大別でき、これらの変化はある規則性をもって変化しているのではないかと予測される。そこで、次節では、どのようにその語形変化が起こっているのかといった異形の発生の仕方を人間関係ごとに検討し、母語話者が心内に備えているであろう接続詞の使い方をさらに探っていく。もともと論理関係を示すために使用されることばとして捉えられている接続詞についても、話しことばで使用される場合にはその語形に差異が現れることが明らかになってきたことで、使用されたスタイルシフトを位相差として捉え、位相の観点からさらに検討してみる。

5. 位相という観点からみるスタイルシフト

本節では、位相という観点から接続詞のスタイルシフトの規則性を検討する。本稿における“位相”

の定義は、田中（1999）と米川（2002）の記述を援用し、1）様式的位相（話しことば/書きことば、場面・相手の差異によるもの）、2）社会的位相（年齢、社会的階層、社会的集団）、3）心理的位相（人間関係、待遇意識）という3分類で捉える。

4.2. の調査結果により、1）の“様式的位相”として、方言の出現や音脱落短縮形・音韻変化＋音脱落といった異形の出現の問題と、3）の“心理的位相”として、会話相手との人間関係による接続詞の使い方に関する差異、という位相差が示された。その具体的な位相差について、人間関係ごとにその特徴をみてみよう（表9）。

表9 人間関係別にみる接続詞の異形の分類

人間関係 基本語	a. 初対面	b. 友人	c. 親女性友人	d. 親男性友人
①だから		*だけん（1）	だか（19）	だか（28） だもんで（1）
②そうしたら		そしたら（8）	そしたら（14） したら（9）	そしたら（1） たら（1）
③そうすると				そうすと（1）
④だけど			けど（3）	*やけどー（1）
⑤そういえば			そえば（1）	そうえば（1）
⑥それで	んで（1）		そいで（2） そで（1） そんで（3） んでー（5）	そいで（6） そで（1） そんで（3） んでー（5） *ほんで（1）
⑦それでは	じゃ（あ）（90）	じゃ（あ）（48） んじゃ（1）	じゃ（あ）（42）	そいじゃ（1） そんじゃ（1） じゃ（あ）（75）
⑧そのとき				そんとき（1）

（ ）内は使用度数を表し、「*」は方言を表す。

雑談時の高頻度語である「じゃ（あ）」の使用を除き、語形のゆれをさらに再検討してみると、単語の短縮形が、ある一定の規則性をもって進化していることが、表9により明らかになる。たとえば、友人同士以上の関係で観察された「そしたら」は、親しい友人同士以上の関係では「したら」、「たら」と基本語の半分以下の長さに短縮し、その短縮は1拍目の音脱落によって発生しているということが観察できる。また、音韻変化に関しては二つの規則性が示唆される。一つ目は、3拍以上の単語で、単語の最初と最後の音以外の音が脱落する現象である。たとえば、「そういえば」の3拍目の「い」が脱落した「そうえば」、さらに「う」が脱落した「そえば」、あるいは「そうすると」の4拍目の「る」が脱落した「そうすと」、などがそれである。二つ目は、2拍目が音韻変化を起こす現象で、たとえば、「それで」の「れ」が「い」になって「そいで」、もしくは「ん」になって「そんで」という異形の発生である。いわゆる、多門・半沢（2006）が記述している音便形の変化である。そして、これらの異

形の発生—いわゆるスタイルシフト—を位相差と仮定すると、1) の接続詞の様式的位相の位相差は、表9により具体化される。また、前節の方言が使用された会話でも指摘したように、「だけん」、「やけど」、「ほんで」などの接続詞の方言の使用については、1) の様式的位相差でもあるが、同時に、2) の社会的位相、3) の心理的位相の位相差とも説明できる。すなわち、会話相手との人間関係（同じ地方出身者という社会的位相・心理的距離という心理的位相に基づく関係）が近く感じた時に無意識に話し手の地域方言が誘因されると判断できるからである。

以上の接続詞の位相差は、日本方言における音韻現象である/o'e//o'i/の融合を、世代・場面、構造という観点から調査した齋藤(2002)の調査結果に通ずる。すなわち、齋藤の調査では、/o'e//o'i/の融合現象は、2拍語・朗読場面・改まり場面では観察されず、「寛ぎ場面」で、「3拍以上の語」でないと観察されない、とされていたが、これは接続詞のスタイルシフトにも援用でき、接続詞の語形変化の場合も3拍以上の語形が変化し、人間関係が近い場合や心的距離が近づいた場合に、接続詞のスタイルシフトが起こるといふ傾向が示された。つまり、接続詞のスタイルシフトの発生には、母語話者の無意識の意識が働いており、接続詞の有す論理関係の意味だけでなく、位相が反映した語や語形の選択が行われ、運用されていることが示唆されたものといえる。

6. おわりに

本稿では、雑談時にどのような接続詞が使用されているのか、その使用傾向とスタイルシフトの実態を探るために、見出し語の判別規定を2通り設定し、4つの人間関係（初対面・友人・親しい女性同士の友人・親しい男性同士の友人）の雑談で使用された接続詞を調査した。その結果、人間関係と接続詞の使用率・種類の豊富さには相関関係があることがわかった。すなわち、人間関係が近づくほど接続詞のスタイルシフトが拡張し、人間関係という心的距離に伴って、“音脱落が進む”、“音韻変化が進む”というスタイルシフトが生じていることがわかった。そして、そういったスタイルシフトの現象には一定のルール下で、単語の短縮が進んでいることが示唆された。地域方言の出現については、人間関係のみでなく、聞き手が有す出身地の方言が共有できると話し手が感じる場合に自動的に転化され、スタイルシフトが生じていることが明らかになった。また、「だから」でなく「だか」が使用される場合、強い心的態度が表れる「だから」の繰り返しを避ける目的および自己主張性を緩和する目的での使用傾向が現れ、若い世代の母語話者が「だから」と「だか」を使い分けて発話している可能性も示唆された。

今後の課題としては、「だから」と「だか」が使い分けられていた会話をさらに検討し、「だか……から」という言語現象を調べるとともに、なぜ「だから」でなく「だか」が使われたのか、そして語形の違いは意味の違いをもたらすのか、についてさらに分析を進めたいと思う。

注

- 1) 本稿における「スタイル」とは、「話しことばおよび書きことばにおいて、個人が選択可能な(独特の)表現上の様式ないしヴァリエーション(variation)のこと。従ってスタイルは音韻、語彙、統語の3部門にわたって認められねばならない」(『英語学要語辞典』2002:632)という記述を援用し、音韻に関するスタイル-音脱落・音韻変化といった語形のゆれと語彙に関するスタイル-方言へのことばの切りかえの2部門について、どのような変異形への転換現象-すなわち「スタイルシフト」-が生じるのかを分析している。
- 2) 「語形のゆれ」という用語は、伊藤(2002:61)からの借用である。
- 3) 辞書に記載されている、いわゆる標準的な単語を本稿では「基本語」と規定する。
- 4) 「見出し語」の規定および判別に関しては、伊藤(2002)を参照した。
- 5) 米川(1996)は「若者ことば」と「若者語」を区別し定義しているが、一般的には、それぞれの研究の中で統一した用語を使うに留まっており、用語の区別や定義に関する統一した見解はない(永瀬, 2002; 桑本, 2003; 上野・定延・佐藤・野田 [編], 2005)。
- 6) 米川(1996:13)は、「若者語」の下位範疇に、「キャンパスことば・学生語」を分類している。そして村田(2005:25)は、この米川(1996)の分類を参考に、「キャンパスことば」を「一般に大学生がキャンパスで使用する、学校に関することば」とし、「学生語」を「キャンパスことばよりも広い概念で、キャンパス外でも、また学校に関すること以外についても言うことば」と定義している。
- 7) 「地域方言としての若者ことば」とは、若者がその土地の伝統的地域方言を変化させて、新しい方言を作り出すことで、これらは「新方言」とか「ネオダイアレクト」などと呼ばれている語形である(永瀬, 2002:219)。
- 8) 「社会方言」とは、「同じ社会を構成する人たちが持っている様々な属性による言葉の違いのこと」で、「若者言葉」以外に、「中年言葉」、「老年言葉」もある(永瀬, 2002:214)。
- 9) 「心的距離」とは、会話参加者間の人間関係の親疎を表し、話し手が会話相手である聞き手に対し無意識に設定する相手との心の距離をさしている。そしてこれは、会話のやりとりの中で話される内容や様々な状況/場面に応じ、ダイナミックに伸縮する、すなわち、相手との距離をとったり距離を縮めたりするものである。
- 10) 本調査結果は、萩原が2007年8月19日に大学コンソーシアム京都(キャンパスプラザ京都)で開催された「第6回 OPI 国際シンポジウム」で口頭発表した際の資料を基に発展させたものである。
- 11) 井出(2006)は敬語を取り上げ、日本語には「上下関係あるいは見知らぬ人には敬語を使う、という社会のわきまえ」(井出, 2006:110)があると述べている。しかし、萩原(2007b)は、教師と学生の「だから」の使われ方の調査結果から、相手によってどのような表現やことばを選ぶかといった言語運用上の“わきまえ”は、井出の指摘している「敬語表現に限られたことではなく、話しことばで使用される接続詞の運用にも観察される」(萩原, 2007b)ことを指摘した。

調査資料

宇佐美まゆみ監修(2005)「BTSによる多言語話し言葉コーパス-日本語会話1」東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプロジェクト『言語運用を基盤とする言語情報学拠点』

参考文献

- 井出祥子(2006)『わきまの語用論』東京:大修館書店。
- 伊藤雅光(2002)『計量言語学入門』東京:大修館書店。
- 猪野健治(編)(1988)『現代若者コトバ辞典:この一冊でワカモノの思想がわかる』東京:日本経済評論社。
- 上野智子・定延利之・佐藤和之・野田春美(編)(2005)『ケーススタディ 日本語のパラエティ』東京:おうふう。
- 加藤主税(編)(1993)『驚異の若者コトバ辞典』名古屋:海越出版社。
- 桑本裕二(2003)「若者ことばの発生と定着について」『秋田高専研究紀要』38号, pp.113-120。秋田高専。
- 齋藤孝滋(2002)「第2章 日本方言の音韻」北原保雄(監)、江端義夫(編)『朝倉日本語講座10 方言』pp.24-49。東京:朝倉書店。
- 田中章夫(1999)『日本語の位相と位相差』東京:明治書院。
- 多門靖容、半沢幹一(編)(2005)『ケーススタディ 日本語の表現』東京:おうふう。
- 永瀬治郎(2002)「『若者言葉』の方言学」日本方言研究会(編)『21世紀の方言学』pp.213-225。東京:国書刊行会。

Indication of Human Relationship in the Usage of Conjunctions in Japanese

HAGIWARA Takae

This paper discusses that the usage of conjunctions indicates a human relationship between participants in a conversation. The purpose of this paper is to demonstrate the usage of conjunctions observed in Japanese natural conversation between undergraduate and graduate students. The data used in this study is the corpus collected from the conversations of 4 groups in different situations (i. the first time meeting, ii. friends, iii. intimate friends between females, iv. intimate friends between males) supervised by Usami (2005). In this study, I established 2 scales for the index of a conjunction: one is the index of an entry word (found in dictionary) and the other is the index of variations for a basic word. The results of the analysis are as follows:

- (1) The first examination shows that a fewer variety of conjunctions are used at the first meeting in conversation, whereas a wider variety of conjunctions are used between friends or intimate friends.
- (2) The second examination shows that the closer the mental distance between the speaker and hearer comes together, the more often variations of conjunctions such as dialects, phonological eliminations or variants occur.

This suggests that Japanese conjunctions, which are to be considered as logical words, function as an indication of human relationship in conversation.